

氏名	おの はるひさ 小野 晴久
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第474号
学位授与年月日	平成16年 3月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	症状の外在化技法を用いた摂食障害に対する治療効果について
学位論文審査委員	(主査) 神崎 晋 (副査) 大野 耕策 川原 隆造

学位論文の内容の要旨

現在、摂食障害の患者数は増加傾向にあり、またその症状も複雑で多彩であるため、様々な治療的アプローチが存在している。しかし治療抵抗性や人格障害の合併等による様々な問題行動への対応については、未だ確立した方法論は存在していない。今回の研究では症状の外在化技法を用いた摂食障害患者への治療的介入を行い、自己記入式評価尺度である Eating Disorder Inventory を用いて、介入前後及び治療開始 6 ヶ月後について評価した。そして症状の外在化技法の治療効果について、1.病型別 (anorexia nervosa、bulimia nervosa) 2.人格障害の合併の有無別について比較し検討した。

方法

本研究の対象は 1999 年 3 月から 2001 年 3 月にかけて鳥取大学医学部附属病院精神科・心療内科に受診し、DSM-IV により anorexia nervosa (以下 AN) または bulimia nervosa (以下 BN) と診断された患者 25 名である。性別の内訳は女性 23 名、男性 2 名、全体の平均年齢±標準偏差は 21.9±3.9 歳、病型別では AN11 名と BN14 名、合併症としては、人格障害を合併した患者が 7 名、合併を認めない患者が 18 名であった。

症状の外在化技法の導入は、1.患者及び家族の訴えを無批判に傾聴すると同時に、既に存在している症状・問題への「意味づけ」の確認を行う。2.食行動異常が軽減し、患者及び家族の日常生活が好転することが治療目標であることを確認し、治療ゴールを共有化する。3.症状・問題への既存の「意味づけ」を否定し、新しい「意味づけ」としての「渦巻き」のメタファーを導入する。4.「渦巻き日記」の記載を依頼し、毎日の生活行動における目標設定を行う。以上の段階を踏まえて行った。

治療効果の評価には、自己記入式の評価尺度である Eating Disorder Inventory (以下 EDI) の 64 項目版を使用し、原則として治療介入前と、第 10 回目面接終了時を介入後、治療開始後約 6 ヶ月後を経過調査時として EDI 記入を依頼した。そして介入前と介入後、及び介入前と経過調査時の EDI 総得点及び 8 つの下位尺度の得点にて検討した。また症状の客観的指標として BMI、嘔吐回数、生理の有無の変化の計 3 項目と、社会適応についてそれぞれ介入前と経過調査時での比較を行い評価した。

結果は平均値±標準偏差で表した。統計学的検定については、2 群間の平均値の差については

Student の t-検定を行い、相関については Pearson の相関係数で評価した。

結 果

1) 全患者の EDI 総得点は、介入前後での比較では 108.2 点から 52.3 点、介入前と経過調査時との比較では 108.2 点から 49.8 点と、共に有意な低下が認められた。また下位尺度であるやせ願望、過食、体型不満、無力感、完全主義、対人不信、内部洞察、成熟恐怖の全ての項目についても、共に有意な低下が認められた。

2) 病型別に比較すると、BN 群に比して AN 群での治療効果が乏しく、特に AN の制限型ではその傾向が顕著であった。合併症については、人格障害合併群の EDI 総得点は 122.9 点から 51.9 点、人格障害を合併しない群の EDI 総得点は 102.5 点から 52.5 点と、合併の有無に関わらず介入前後で有意な低下が認められた。

3) 症状の客観的指標である BMI、嘔吐回数、生理の有無の変化については、BMI、嘔吐回数の 2 項目については介入前と比較し有意な改善を認めた。また無月経の患者数は 11 名(n=23)から 8 名(n=19)に減少した。

4) 社会適応の変化については、調査可能であった対象患者(n=21)の 76%が社会適応良好であるか、介入前と比べて社会適応の向上が認められた。

考 察

1) 症状の外在化を用いた治療介入により、短期的に自己評価の改善が認められた。この事実は患者と早期に協力関係が確立されたことによるものであり、治療中断例の多い摂食障害に対して、症状の外在化を用いた初期介入は有効であると思われた。

2) BN 群に対し AN 群の治療効果が乏しかった点については、症状の外在化の導入に用いる「渦巻き」のメタファーが、AN の特徴的な心理特性である自己の身体変化の受容や、安定した同一性形成の困難を短期間で意識化するには不十分である可能性と、低体重や低栄養状態による二次的な心理的变化が関係していると思われた。

3) 人格障害の合併の有無に関わらず、介入後自己評価の有意な改善が認められた。この事により、症状の外在化を用いた治療的介入は、摂食障害の初期治療において幅広い適応を持ち、治療抵抗性や人格障害の合併等による様々な問題行動の有無に関わらず、治療効果が期待出来る治療法の一つであると思われた。

4) 経過調査の結果から、症状の外在化の治療効果が初期介入のみならずある程度の期間に渡って持続しており、自覚症状に加えて身体状態の軽減や社会適応向上にも寄与している可能性が示唆された。

結 論

摂食障害への症状の外在化を用いた治療的介入は、治療抵抗性や人格障害の合併等による様々な問題行動の有無に関わらず治療導入が容易であり、短期間で治療効果が期待出来る、極めて有用な治療法の一つである。

論文審査の結果の要旨

今回の研究は鳥取大学医学部附属病院精神科・心療内科で症状の外在化技法による治療を受けた25名の摂食障害患者を対象に、治療介入前・介入後・経過調査時に自己記入式評価尺度である **Eating Disorder Inventory** を用いて、その治療効果について検討したものである。その結果、全例で治療効果を認め、特に病型別ではAN群よりもBN群においてより治療効果を認め、合併症別では対応が困難である可能性が高い人格障害を合併した症例においても、合併しない症例と同様に治療効果を認めた。この結果は、治療抵抗性や人格障害の合併等による様々な問題行動への対応については未だ確立した治療法がなく、患者との協力関係の早期の確立が重要である摂食障害の治療において、極めて重要な知見であると思われる。

本研究は症状の外在化の治療機序を解明するうえで、また摂食障害患者への治療的介入を検討するうえで極めて重要な示唆を与える論文である。従って、本論文は、精神神経医学分野での学術水準を明らかに高めたものと認める。